

蛇行する意識のほとりで君と那由多の夢を見る。



『蛇行する意識のほとりで君と那由多の夢を見る。(A5/54P/400円)』の冒頭サンプルです。  
自家通販予約承っております。

■収録■

- 白との邂逅 P3～11 (web版を大幅に加筆修正)  
文子 P13～17 (web版を大幅に加筆修正)  
繭還り P19～25 (潜む黒を改題、大幅に加筆修正)  
花の女 P27～33 (web版を大幅に加筆修正)  
嘘爛漫 P35～40 (書き下ろし)  
黒との邂逅 P41～49 (書き下ろし)

六人の『私』による、彼岸と此岸の狭間の和風伝奇掌編集。

白浜、炎天、白い女との邂逅。 —白との邂逅—

水になるの。文子が言い出したのは今朝のことだった。 —文子—

私の村には「おまあさま」が住んでいる。 —繭還り—

私に花を生けてくださいまし。女はいつも同じ言葉を口にする。 —花の女—

弟の嘘は花となる。 —嘘爛漫—

洋館、暗闇、黒い男との邂逅。 —黒との邂逅—

表紙：YURIKO

■詳細■

階亭 Information <http://kizahashi6.web.fc2.com/off.html>

## 白との邂逅

---

昔から腺病質な子どもであった。庭を駆ければ熱を出す、水を汲めば熱を出す、手習いをすれば熱を出す。とにかく何かにつけて、熱を出しては寝込んでばかりいた。

私の生家はそこそこに大きな呉服屋で、私はその家の長男であった。倒れてばかりいる私を見て、父はふがいないと嘆息した。そんな父を見て、母は申し訳ございませんと謝った。そんな両親を横目に、私は出来損ないのこの体を恨みながら、早くお迎えが来ないものかと願ったものだった。

私の虚弱の理由は、よく分かっていない。医師が診ても分からぬと言われ、薬師が診ても分からぬと言われ、占い師が視ても分からぬと言われた。

そんな私に、お前は魂の半分をあちら側に置いてきたんだよ、と言ったのは祖母だった。祖母のその言葉は、幼き日の私の心を慰めてくれた。私は、半分をあちら側に置いてきた不完全な存在であるのだ。そう思えば、両親に疎まれることも、使用人に小ばかにされることも、すっと納得できた。人に好かれ愛される役目は、あちら側に在る私の半分が担っているのだ。こちら側にいる私は、あちら側の私の残り糟なのだ。ならば、愛されぬことも、虚弱であることも、仕方のないことである。そう思い、慰めながら、幼き日の私は日々をやり過ごして生きていた。

私の虚弱は、成人した今も治っていない。店は弟が継いだ。弟は私と違って頑強で、明るく、両親にも使用人にも好かれていた。弟は、私が店を継ぐべきだと強く言ったが、私は首を横に振り続けた。誰が見ても、私よりお前が継ぐのが適任だと、よく言って聞かせた。しぶしぶ頷いた弟の顔にはありありと仕方なしと書いていたが、店が繁盛していると耳にするたび、私の判断は間違っていなかったのだと満足している。

店を弟に任せたのち、私はまるで逃げるかのように鄙へと移り住んだ。うつる病気だといけなから、と適当な理由を述べて逃げ行く私を引きとめたのは、弟だけであった。

私が移り住んだのは、海辺の洋館である。もともとは、毎年避暑に訪れていた別荘であった。時代遅れと言って良いだろう、古めかしい洋館だ。家族で毎年訪れていたそこは、私たち兄弟が長ずるにつれて足の遠のいていた場所だった。

ここは静かだ。潮騒の音で目覚め、潮騒の音と共に過ごし、潮騒の音を抱えて眠る。都の姦しい喧騒と違って、ここで生まれくる音はどれも、私の耳を煩わせることは無い。ひどく、心地良かった。

洋館に住むのは私と、年老いた使用人だけである。時折、都から弟が訪ねてくる。無理に足を運ばなくて良いと私は言うが、弟は頑として聞かなかった。兄を心配することの何がいけないと言う弟のまっすぐな視線が、私には眩しかった。

ふいに、ドアをノックする音が響いた。ベッドに横たわり、読書に勤しんでいたところであった。私は体を起こし、入るようと言う。

「――様がお見えです」

ぼそぼそと、使用人が枯れた声で言った。名は聞き取れなかったが、おそらくは弟の名だろう。ここを訪れるのは、弟くらいのものである。どうぞと一声かける。

「あいかわらず、陰気な館だな」

開襟をつまみ胸元に風を送りながら、弟は暑気にうんざりしきった顔で部屋へと入ってきた。最近の流行りだと聞く、新しい形のスーツがよく似合っていた。

弟は帽子を使用人に預けると、下がるようにと手を振った。まるで野良猫を追い払うような仕草を私は視線で咎めたが、弟はまるで気づいていないような顔をして、ベッドのへりにどきりと腰をおろした。ドアが閉まると同時、呆れた顔で私を見る。

「そしてあいかわらず、我が兄上も陰気な顔をしていらっしやる。その本も陰気なのかい」

「そうだな。面白くはない」

「ハ、面白くもない本を熱心に読む理由が、僕には皆目分からないね。陰気なご趣味だ」

「うん、私もそう思う」

弟は大げさに肩をすくめた。

## 文子

---

なだらかな上り坂の頂点から、町を見下ろす。曇天の下を、暑さに茹だった人々が行きかっていた。

両脇の塀の内の木々から、じよじよ、じよじよ、と蟬の鳴く声が聞こえた。やかましい蟬の声に、氷売りの声がかき消される。腕に抱いた盥の中の氷の塊は、すでに溶けはじめていた。

門から直接庭にまわる。文子は縁側で私の帰りを待っていた。ちょこりと腰を下ろし、茹だる夏の暑さなどまるで気にした様子はなく、涼やかに微笑んでいる。盥にはった水に足をつけて、鼻歌まじりにばしゃばしゃと水を跳ね上げていた。

まるで人形のような、と私は思う。肩で切り揃えた、真っ直ぐな黒い髪、真っ白な頬、華奢な手足。覗く皮膚のうすら白さは、何かの菓子で作ったかのようなのである。その皮膚を押し上げてぽこりと浮かぶ骨の形も、芸術家が粋を凝らして作り上げた細工のような。

文子は私を見るなり、遅いわ、と口を尖らせた。文子の唇は形良く、色良く、まるで果実のようなようであった。

すまないね。詫びながら、私は今しがた買ってきたばかりの氷を、文子が足を浸す盥に移し変えてやる。

水になるの。

文子が言い出したのは今朝のことだった。ちゃぶ台を囲み、飯粒を食らっている時だった。そうか、と私が答えると、そうよ、と文子は言った。

移し変えた氷を、文子がつま先で玩んでいる。そのつま先が、透けている。つま先はもう水になってしまったようだった。まるやかな踝をもう見られないのかと思えば、やはり惜しい気がした。

文子が水を蹴り上げて楽しげに笑う。白い夜着が捲れて、静脈の目立つ、痩せた白い足が覗いた。文子の足首から先は、水に溶けてもう無かった。途中で途切れたふくらはぎと、空気の境目が、薄ぼんやりと霞んでいる。

私は顔にかかった生暖かい水を拭い、文子の隣に腰をおろした。汗に濡れた紺緋が気持ち悪い。胸元を摘んで風を送ってやると、幾分かはましになった。

じよじよ。

じよじよ。

蟬がうるさい。

まるで、木そのものが鳴いているかのように思えた。蟬の生る木だ。あの木も、あの木も、夏を迎えるたび蟬をたわわに実らせる。

白い空に枝を這わせる木の下に、薄汚れた虎猫が寝そべっていた。塀も、夏の陽に熱されて熱かろうに酔狂なものだ。それとも今日は曇天だ、さして熱くはないのかも知れぬ。私は猫になったことがないから分からない。

私の村には「おまあさま」が住んでいる。

おまあさまは護神で、禍神だという話だ。村の大人たちは事あるごとに「そんな悪い子はおまあさまの贄にするよ」「ああ、良い子だ。おまあさまもさぞお喜びだろう」と子供たちに言い聞かせていた。

私もその、事あるごとにおまあさまの話を聞かされて育った子供の一人である。とはいえ私におまあさまの話を言って聞かせたのは、実の親ではない。というのも、私は赤子の頃、彼岸花の群生の中に落ちていたと聞かされている。私自身にその記憶は無いのだが、私の養い親であるろくでなしがそう言うのだから、きっとそうなのだろう。

そのろくでなしは、おまあさまの話のついでに、事あるごとに言っていた。お前が女だったならさっさと夜街に売り飛ばしていたのになあ。ごくつぶしめ。このごくつぶしめ。

ろくでなしの言うとおりの、私は確かにごくつぶしだった。そろそろ数えて十三にもなるというのに痩せぎすで、俵もろくに担げない。畑もろくに耕せない。得意なことと言えば、赤子をあやすことぐらいである。その為に、本来ならば女子がすべきことである赤子の世話が、私の担う仕事だった。私の年の男子ならば楽に稼いでくる銭を、私は倍も働いて、ようやく稼ぐことができた。その銭の額ではろくでなしを満足させることは到底できず、私自身の腹を満足させることも到底できず、なるほど確かに私はごくつぶしだった。育児に疲れた村の女たちに、私は重宝がられた。あのろくでなしもね、昔は良い男だったんだよ、おまあさまに嫁を取られてからあんなつまんだ、可哀そうな奴さ、と同情めいた言葉をかけてくれることもあった。しかし男たちには、男のなりそこないめと馬鹿にされた。中でも正太郎という名の、村の悪孺子にはほとんど困った。

正太郎は村の長の孫で、私より一つ年嵩だった。正太郎は腕力にもものを言わせて、私に言うことを聞かせた。お前は俺の舎弟なんだから言うことを聞くのは当たり前だろうと、やれあの店の娘を口説いてきてみる、やれあの家の庭の柿を盗ってこい、やれあそこの犬と組み合ってこいなどと、無茶なことばかりを言っただけで、私を困らせてくる。舎弟なんぞになった覚えはないと私が言っても知らぬ顔で、私の頭を一つはたいて、ぶたれなくては逆らうな、と言う。なりそこないと遊んでやるのは俺くらいのものだから、もっと感謝しろなどと言う。ぶたれるのは嫌だったのでしぶしぶ言うことを聞いていたが、私のその態度が気に入らないのか、結局私はいつも正太郎にはたかれてばかりいる。

## 花の女

---

私に花を生けてくださいまし。

現れるなり、女はいつも同じ言葉を口にする。

「花を生けろと言ったって、どうすれば良い」

私がそう尋ねても、返ってくる言葉はいつも同じだ。

私に花を生けてくださいまし。

女は今宵も枕元に膝をつき、言う。花を生けてくださいまし。

私はもそもそと布団から這い出て、女を見やった。

差し込む月明かりを、女の死装束がぼんやりと照らし返している。まるで女そのものが光っているようだった。

女の髪は癖が強く、お世辞にも美しいとは言えない。色も薄く、黒と言うよりは茶に近い。

何よりも目を引くのは、女の瞳の色だった。

女の目は、濃い緑色をしている。

その目が、じっと私を見る。

「お前は、私にどうしてほしいんだ」

やはり返ってくる答えは同じ。

私に花を生けてくださいまし。

女は無言で私を見ている。私は寝乱れた髪を更に掻き乱し、もう一度布団に潜り込んだ。

このやりとりを、もう何度繰り返しただろう。私が何を言っても、女はいつも同じ言葉しか口にしない。それに飽き、私は女をうっちゃり惰眠を貪ることに決める。そして朝になれば、女の姿はどこにも無い。

眠りに落ちていく意識の片隅、私は考えた。きっと次の夜も女は現れるだろう。そしてまた同じ言葉を口にする。

私に花を生けてくださいまし。

裏の蔵の傍の茂みから、女の泣き声が聞こえた。すすり泣くその声に、私はふらふらと歩みを進める。女はすぐに見つかった。茂みの中に蹲っている。身に纏った女中服は、襤褸きれのようになってしまっていた。

「どうかしたか」

私が声をかけると、女は振り返った。最近この屋敷に上がったばかりの、年若い女中だ。頬は赤く腫れ、唇が切れている。乱れた着衣から覗く乳房が、まろく白い。

女は私の姿を見とめるなり、がたがたと震えだした。ヒ、と息を呑み、ままならぬ足取りながらも、まろぶように駆けて行く。

邸内に狼藉者が潜んでいるのならば、ゆゆしき事態である。私は手を叩いて、執事を呼ぼうとした。だが、その手を掴んで止めた者がいる。

弟だった。

「あの子がいけないのさ、あに様<sup>さま</sup>に色目なんて使うから」

にこりと微笑む。それこそ花のほころぶように、と喩えるのにふさわしい笑みだった。弟は、今年で十四になる。

「馬鹿を言うな。話したことすらない相手に惚れるものか。ましてや色目など」

「罪な男だなあ」

朴念仁朴念仁、と弟は歌うように繰り返す。弟がぐるりとその場で回ってみせれば、色濃い花の香りがした。毒々しいほどに、甘い。

「……犯したのか」

「まさかあ。あんな芋相手じゃ勃つものも勃たないさ」

まるで少女のような顔をして、弟は言う。

「芋のくせに舞い上がっちゃってさあ、可笑しいったら無いね。僕が声をかけたら、それだけで頬を染めて。薄汚い雌豚のくせにね？ まさか本気で、僕が相手にしてやるとでも思ったのかな？」

女中の蹲っていた付近には、血痕があった。弟の足袋にも血が付着しているから、強かに蹴ったのだろう。

「ほんのついさっきまでは、あに様にご執心だったくせに。気の高い雌豚になんて、何の価値も有りはしないよ。だから、あに様が心を痛める必要なんて、これっぽっちも無いのさ」

血痕の散った辺りをじっと見つめる私を覗き込み、弟は優しげな声で嘯く。その形良い口から、花が零れた。

弟の嘘は花となる。



## 黒との邂逅

---

陽だまりに生きている男なのだと、我ながらに思う。明朗快活、容姿端麗、眉目秀麗、頭脳明晰、質実剛健、完全無欠。私を表す言葉を並べ上げればきりが無い。

反して兄は、日陰に生きる存在だ。表すならば、隠花植物。兄はいつも鬱々と、暗い顔ばかりをしている。虚弱体質である兄は、幼い頃から床に伏せてばかりいた。何をしてもすぐに熱を出し、青い顔に冷や汗を浮かべてばかりいた。外を駆けずり回っていた私は、そんな兄の慰めになればと、花だの虫だの小禽だのを、兄の私室に持ち込んで、兄に渋い顔をされていた。

私の生家はそこそこに大きな呉服問屋である。両親は、虚弱な兄に店を継がせることを早々に諦めた。お鉢が回り、私が継ぐことになったのだが、これが成功して店は多いに繁盛している。

私の才には我ながら驚かないでもない。しかし、店を私に継がせると両親が告げた時、兄が唯々諾々とその言葉に従ったのが私は腹立たしかった。何かしら異を唱えて欲しかったのだ。両親や周囲の者に愛されることを諦めている兄だ、それを望むのは酷だと分かっている。だがやはり、腹立たしかった。兄は確かにうらなりであるが、学が無いわけではない。いや、むしろ学だけならば私の上に行く。無駄とも思える知識が、兄の小さな頭にみっしりと詰まっていることを、私は知っていた。兄の無駄に良い頭脳が埋もれてしまうのが、私は惜しかった。兄が認められずにいることが、私は悔しかった。学の有る無しと商才はまた別だろうと兄は言う。それもその通りだとは思う。だがそれでも、やはり、私は悔しかったのだ。何よりも、何かを諦めたかのように生きている兄自身が、口惜しかった。

兄をそんな風にしたのは、祖母である。祖母が兄に呪いをかけたのだ。

お前は魂の半分をあちら側に置いてきたんだよ。

寝込んでばかりいる兄を、祖母はそう言って慰めた。その言葉を投げかけられて以来、兄は何かを悔しがることも、求めることも、しなくなったように思う。

救われたかのような顔をしていた。憑き物が落ちたかのような顔をしていた。祖母の言葉は、確かに兄を救ったのだろう。しかしそれ以来、兄がこちら側での出来事に、執着することは無くなった。祖母の言うところのあちら側へばかりを想い、羨望の眼差しを送るようになった。そんな兄を見ていると、私は不安に苛まれる。祖母の呪いが、兄をあちらに連れて行くのではないかと。